

江沢民来日から天皇訪中へ

「友好」至上外交の陥穽

なかじま みねお
中嶋嶺雄

東京外国語大学教授

はせがわ けいたろう
／長谷川慶太郎

国際エコノミスト

鄧小平の「最後の闘い」も党独裁を守るためだ。
所詮「中国」は日本外交の手に余るのではないか



中嶋 中国の路線闘争、権力闘争が深刻になってきましたね。そもその発端は、この一月下旬から鄧小平が南方を視察した。その際「根が深いのは『左』だ」という保守派攻撃の講話を行った。その講話の中味を三月九日、十日に開かれた政治局全体会議で共産党が正式に機関決定をした。加えて三月二十日の全国人民代表大会（第七期第五回会議）では、李鵬首相も政府活動報告で改革・開放路線と鄧小平評価を大いに強調し、保守派は総崩れである——というのが目下のところ伝えられる情勢で、一般には、鄧小平らの改革派が保守派に勝った、と報じられていますが、果してこのままいくのかどうか、話はそう簡単ではない、というのが僕の見方なんです。

長谷川 私もそう思います。

中嶋 というのは、鄧小平は、去年十一月の八中全会（中

国共産党第十三期中央委員会第八回総会）では敗北しているんですね。ソ連が解体して、これほど世界が変わったというのに、それについての議論は八中全会でできなかった。どうでもいいような農業問題について長文の決議をしただけで、予想されていた朱鎔基、鄧家華ら鄧小平に後押しされた改革派の政治局入りも果せなかった。これは明らかに鄧小平の挫折であり敗北であって、必死になって巻き返しをはかったのが、この前の南方視察——深圳、珠海といった経済特区や上海の春節（旧正月）前夜祭への登場だと思うんです。つまり形からいえば、文化大革命のときの毛沢東と同じパターンなんです。あのときも毛沢東は北京では少数派になってないんです。北京を脱出して、上海から文革の狼煙（のろし）をあげたわけですから。

長谷川 鄧小平は最後の勝負に出たんですね。彼は、明らか

に自分の死期が迫っていることを意識して行動しています。

中嶋 そうですね。観光客が撮ったという深圳での鄧小平の写真が発表されましたが、ピンボケでしたね。上海での様子を映したテレビもはつきりしていなかった。あえてピンボケにしているんだと思います。私は、その時期に鄧小平の親戚筋が撮ったというごく最近のスナップをある中国人から見せてもらったんですが、こちらの方は顔もはつきり映っていました。まあ、元氣そうではありましたが、皮膚が弛んでいて、毛沢東の晩年に似た感じでした。

長谷川 マルクスのもとへいくのは、もう時間の問題だと、彼自身、肚をきめたんだと思うんです。今年末に予定されている第十四回党大会まで生きておれるかどうか。

中嶋 それは天のみぞ知るで……（笑）。

長谷川 たとえその頃まで命があっても、党大会に出る体力があるかどうか。それで昨年の八中全会で仕上げをしようとしたら、失敗した。残る最後の手段で、一か八かの大勝負に出たわけですね。鄧小平の実権が、党や軍の内部で確立しているとは思えません。しかし中国の政治家の伝統として文人には繋がりがある。その繋がりを利用してマスコミで講話を発表し、保守派に攻撃をかけたわけです。

いま僕が注目しているのは、上海の、巨大な国家プロジェクトが進められている浦東地区です。あそこに鄧小平はすべてを賭けているような感じです。上海からは江沢民、朱鎔基といった人たちが出ている。彼らを成功させようとするなら、何としても浦東の開発を支援してものにしないと、自分

の死んだあとグチャグチャになる——そういう判断を鄧小平はしていると思います。

迫りくる中国革命の大団円

中嶋 これから十四回党大会までは、路線闘争、権力闘争が激化するでしょうね。そういう闘争は共産党体制であるかぎり、いつの時代にもあるわけで、毛沢東・周恩来の時代ともよく似たところがあります。しかし今度という今度は、本当に「最後の賭け」なんです。まず革命第一世代が、間もなく総退場するでしょう。鄧小平、陳雲が八十八、八十七歳になりますから。そして、今度は、単に中国の内政をどうするかという闘争ではない。今日の歴史の潮流に照すと、まかりまちがえば共産党体制が瓦解するかもしれない、中華人民共和国が解体するかもしれない、そういう瀬戸際なんです。中国革命の大団円がいよいよ迫っているという大変な時期なんです。

長谷川 おっしゃる通りですね。中国共産党の十四回大会は、ソ連共産党の二十八回大会と同じ位置づけになってしまいかもしれない。また国際的には、それしか方向がないという気がしますね。

いつも思うんですが、国家総力戦で負けると、負けたほうの政治体制は戦後もたないんです。第一次大戦以来そうですね。冷戦も戦争だと考えれば、共産国は負けた。共産党の支配体制は潰れてしまふ。ヨーロッパではソ連が潰れました。

次はアジアで、中国も北朝鮮もベトナムも、共産党の支配体制は潰れていくと思いますね。

中嶋 そうそう。それは意外に早いかもしれません。

その問題の前に、もう少し中国の政治情勢を分析してみますと、俗に「改革派」「保守派」というけれど、これは必ずしも正しくはない。例えば、最近、鄧小平と同じように経済中心の改革を唱えている楊尚昆国家主席。彼が果して改革派なのか。あるいは江沢民総書記でさえ、本当に改革派といえるかどうか疑問です。李鵬首相はもとも保守派なので必死になって改革派のポーズをとっている。

長谷川 おっしゃる通りで、天安門事件で残った連中は、みな改革派じゃないですよ。あれで潰された連中が改革派なんです。

中嶋 ええ。真の改革派というのは民主派であるべきで、いまの中国の政治舞台にはいなくなった。胡耀邦や趙紫陽、それにつながる知識人たちを全部排除した上での現在の保守の対立なんです。改革派というと、物分りがよくて、中国を開かれた方向へもっていくみたいな見方があるけれど、どんな話でもありません。ですから、いまの保守派にしろ改革派にしろ、共産党崩壊が起きるんじゃないかと、民主化に対する、すごい危機感がある。それがいわゆる「和平演変（平和的手段による社会主義転覆）」の問題ですね。その危機感の上に立って船が左右に大揺れに揺れているために、よい党内闘争はシリアスになるんです。

長谷川 お互い生きるか死ぬかだから、譲歩できない。妥

協できない。しかもいま政治の表舞台に残っている連中に共通しているのは、自分たちが中国共産党を作ってきた、あるいは作ってきた人間の子孫だというプライドですね。

根強い保守派

中嶋 改革派、保守派というより、本当は鄧小平派、反鄧小平派というべきでしょうね。例えば鄧小平にしても矛盾しているわけで、たしかに彼は、毛沢東や華国鋒の中国をひっくり返した。しかしこれは陳雲もそうで、その意味では全員が改革派です。ところが、その改革を、民主化という政治改革まで進めるかというと、その点に於いては、これまたみな保守派なんです。鄧小平は、最近の講話でも「ブルジョア自由化反対」を唱えている。違いは、資本主義を一部とりいれ、経済を發展させたほうが社会主義を守れるのか、それとも、経済發展より社会主義の枠組やイデオロギーを優先させるか、ということなんです。その点、保守派の陳雲のほうにも聞くべきものがありますね。彼は「烏籠経済論」（市場経済という鳥は社会主義経済という枠組のしっかりした鉄の籠にいておくべきだ）を唱え、中国のような国は原則でキチンとしておいて一歩一歩やっていったほうが、右へ揺れ左へ揺れて混乱し停滞しなくていいじゃないかというんです。それにもう一つ、陳雲という人は身辺がきれいで、人柄もいらしい。息子の陳元を高級ポストにつけている点では鄧小平と同類ですけれど。

長谷川 陳元は銀行の親分（中国人民銀行行長）なんです
ね。

中嶋 だから陳雲系も無視できない。陳雲系の保守派・原則派には割と人材がいるんです。最近では鄧小平にゴマをすってまずけれどまず李鵬首相、病気で今回会議を休んだという李先念・人民政治協商会議主席、それから政治局常務委員の宋平。彼は鄧小平を批判したようですが、それも一理あるわけで、引退したはずの鄧小平が出てきて、鶴の一声で政治を壟断する。そのこと自体が改革派じゃない証拠だと……（笑）。宋平は十四回大会に向けての組織運営の責任者ですからね。それから自己批判したと伝えられるけれど姚依林・副首相兼政治局常務委員、国家副主席の王震、北京市長をやった彭真。この三月中旬に死んだ王任重・元党宣伝部長も保守派の重鎮で、昨秋の『求是』（党理論誌）では大変厳しい党の指導原則を強調していました。

宋平に加えて「新四人組」といわれる「人民日報」社長の高狄、王忍之・党宣伝部長、賀敬之・文化相代理——いずれ

も辞めたとか辞めないとかいう話が伝わってきていますけれど。ただ総じていえば保守派の方に老齢・病弱者が目立ちますが、鄧力群、薄一波、胡喬木の保守派イデオログ三羽鳥もまだ健在です。これらの連合体制を支えている保守派の基盤として党中央顧問委員会（陳雲主任）がある。これも鄧小平はつぶしたい意向だと伝えられますが、老齢化した要人を政治の第一線から退けるというのは、中国の政治的伝統の中では大変なことなんです。

長谷川 はい。台湾もそうでしたが、一応うまく退けましたね。

中嶋 一方、改革派では鄧小平以外に誰がいるのか。鄧小平の言うことを何でも聞くといい楊尚昆には人望がないし、弟の楊白冰・軍総政治部主任を重用して軍を抑えようとしている。けれど鄧小平と楊尚昆が組んでいるだけでいやだという幹部もいる。

長谷川 軍の内部にね。
中嶋 そこへもってきて、上海ではどうしても人気の出な

PHPの本

“世界的混沌の時代”と日本
逆境がさらにしなやかな日本型技術をつくる

石井威望

定価一、三〇〇円

（税別）

敗戦、石油ショック、円高などの危機を、常に飛躍へと結びつけた歴史から何が見えるか。新たな転換点で描く、日本の青写真。

日米技術連邦に敵なし
日米共存と世界の繁栄

唐津一

定価二、四〇〇円

（税別）

今こそ民間企業・消費者主導による強力な「経済技術同盟」を構築すべき時である。日米問題に通暁する著者の緊急提言。

PHP研究所

(102)東京都千代田区
三番町3番地10
電話(03)3239-6233代

かった江沢民が総書記になっている。天津市長だった李瑞環・政治局常務委員も改革派だというけれど、彼はかつて宝山製鉄所が問題になったとき「日本人に騙されるな」とすごいことを全国人民代表大会の場で言った人で、要注意人物。

首相の李鵬と同様に政治局常務委員の喬石は当面、鄧小平の立場に接近してきましたが、鄧小平がいなくなったらまたどちらに向かわからない。いわば中間派ですね。

だから、改革派といえば、朱鎔基とか鄧家華という副首相——まだ力は弱いですが、せいぜいこれくらい。僕は広東省長だった葉選平に期待していたんですよ。彼は葉劍英の息子で、鄧小平以上の改革派。鄧小平は広東の経済特区を視察して、うまくいっているじゃないかといったけど、これは鄧さんの功績ではなくて、まさに葉選平が北京の言うことを聞かず、税収の九〇%を自分のところで使って再投資し、広州を香港とリンクさせて、あそこまでもっていった。その葉選平も、政治協商会議副主席という名目だけで実権のないポストにまつりあげられた。ところが彼は、この前の政治協商会議には欠席して、海南島に行っている（笑）。

いずれにせよ、鄧小平は北京ではうまくいかず、南を頼って行ったという感じがするんです。

長谷川 一方、保守派のほうも屈折した心理状態ですよ。保守派だって世界の大勢を知らないわけではない。アメリカが陰謀を企んでソ連を潰した、なんて言ったって、誰も信じやしない。「和平演変」を唱えて党内を引き締めようとして、縋まらないということを当の保守派が一番よく知ってる

わけです。これは鄧小平に対する単なる嫌がらせだと。保守派が世界の情勢を知らないと思ったら大間違い。その情報の早さと量と質の高さは、驚くほどです。

だから、思想教育運動が、最近は全然行なわれていない。それは合併企業の人に聞いたら、すぐ分る。「やってるか、あんたんとこ?」「いえ、最近、党書記がなんか言ってるらしいけれど、人が寄りませんね」って。

中嶋 学生たちもマルクス・レーニン主義の学習や「四つの基本原則」の学習をやられていますけれど、もう全然、真面目に聴いてないですね。つまり、共産党では駄目だったことは、学生や知識人ばかりか市民の間では当然になっていて、レジディマシー（正統性）は完全に崩壊している。

画期的な台湾の「二・二八」謝罪

長谷川 その上に、彼らに一番影響を与えているのが台湾なんです。李登輝総統が二・二八事件を正式に謝罪したんですよ。あれが画期的な事件なんですよ。

中嶋 そうですね。映画「悲情城市」にも描かれてましたが、一九四七年二月二十八日に台北や基隆で、国民党軍による現地住民の虐殺があった。それにふれることは台湾では永年タブーだった。共産党の天安門事件と同様の、国民党の大きな瑕（きず）だったんですね。ところが、この二月にその調査報告書が出て、それと同時に李登輝さんが、遺族に対して謝罪と慰霊をしたんです。

長谷川 そのニュースが東南アジア全域に流れたんです。

それ以来、例えば香港でも台湾に対する評価が上がりましたね。香港は中国共産党に抑えに抑えられていて、台湾系だということだけで表立った活動ができなかった。それが、一挙に国民党はいいじゃないかとなった。

中嶋 彭明敏さん——台湾大学の元法学部長で、反乱罪に問われたのち、七〇年に台湾からアメリカへ劇的に亡命した世界的な宇宙法学者ですが、今年中には台湾へ帰るんです。

長谷川 あ、帰るんですか。彼は中国の法制史の最高権威ですからね。それは大事件だな。

中嶋 帰国する前に日本に来ることになっているんです。台湾の最近の一連の政治改革や二・二八事件の再審によって、彭明敏さんも李登輝総統と心が通じあうようになった。

長谷川 鄧小平が、中国からの亡命者に帰ってこいと、急に言い出したでしょう。その影響かもしれませんね。

中嶋 いや、鄧小平が本当に天安門事件の非を認めたのなら別ですけど……。李登輝さん自身は、むしろ二・二八事件の犠牲者の側に立ってきた人ですからね。いずれにせよ、こうなってくると、おっしゃるように、台湾の影響はきわめて大きくて、やがて「和平演変」が大陸に訪れたとき、北京に国民党が旗を立てる可能性は十分ある。

長谷川 ありますね。

中嶋 かつては汚れているように思われていた青天白日旗が実に新鮮に映っている。しかもいま台湾は、孫文の三民主

義を新しく解釈して「現代三民主義」つまり「自由、民主、均富」という普遍的原理を提唱してますね。

長谷川 中国本土でも三民主義は否定できないんですよ。

いつも「われわれは三民主義の伝統に則って……」と演説していますから。国民党が「われわれは三民主義をこのように理解し、実現した」と迫っていけば、その影響力は大きいですよ。それから、台湾では二・二八があったけれど、同じころ、本土のほうでも、土地革命のため、二十万人とか三千万人の——本当の数字は分りませんが——流血を伴う弾圧があった。

中嶋 あるいはチベットでも、解放、後に百万人以上のチベット人が殺害されている、とダライ・ラマ側は言っている。共通した瑕があるんですね。

長谷川 はい。そして台湾のほうがいち早く謝罪した。それから、老人たちを政界から追っ払った。この効果も大きい。それまでは、湖南省選出とか雲南省選出といった終身議員が特権にしがみついていたわけですね。

中嶋 台湾の場合、名誉も与え、退職金も出して、どうやら実現できたけれど、本土のほうは、長老政治家をそう簡単には辞めさせることができないでしょうね。いずれにしろ、中国の政局の推移を考えると、当面、鄧小平がこのまま攻勢を続けるかもしれません。何といっても彼は十三回大会のお墨付をもっている。趙紫陽が訪中したゴルバチョフに「すべての重要事項の決定は鄧小平同志に委ねる」という秘密決議があると漏らしましたね。そのこと自体問題だけど、とにかく

く彼にはある種の権威とカリスマ性がある。それも彼が生きている間のことです……。

一方の保守派は、それぞれのキャラクターはそれほど大きくないけれど、連合体制の総体としてみると、非常に強い。

日本のような自由の国でもまだマルクス・レーニン主義が正しいなんて議論があるくらいだから、ましてや五星紅旗を掲げている国では、やはり基盤は強いですね。

逆に改革派のほうには矛盾が大きい。経済は開放で、政治は締めつけなんて、完全な矛盾で、この矛盾はどこかで爆発する可能性がある。

天安門事件が深刻だったのは、単に軍が、民主化運動を抑えた——それ自体も大変なことですが——というだけではなく、党内の権力闘争がそこに結びついていたところにあるわけですね。トップの趙紫陽は、涙ぐんで学生のところを下りていったわけです。それがもっと大きな形で起こらないという保証はない。

大動乱で難民発生？

長谷川 もしそれが爆発したら、今度は中国全体の大動乱になる、その危険を一番感じているのは、実は台湾ですよ。

中嶋 今でさえ台湾には、本土からの難民が沢山やってきて、追いつくのに必死ですからね。

長谷川 難民を乗せた漁船がパトロール中の台湾のフリゲート艦に衝突して死人が出るなんて時々騒いでますね。

中嶋 中国の国内では、盲流現象——経済の発達した都市に貧しい民衆が流れこむ騒ぎで大変ですからね。一昨年は広州がすごかったけれど、今年は福建省の廈門^{アモイ}ですね。

長谷川 ソ連・東欧の崩壊のとき、難民が押し寄せるのではないかとヨーロッパ各国が危機感をもった。似たような危機感を台湾も日本も、それからベトナムももっている。

何しろベトナムは地続きですからね。「日本はまだいいですよ、海があるから」とベトナムの要人は言っていました（笑）。盲流がハノイへ押し寄せてはこないかと本当に心配している。それから旧ソ連も不安をもっている。黒竜江をへだててすぐですから。北朝鮮とも中国は隣りあっている。鴨緑江を隔てて遼寧省があるし、豆満江を挟んで吉林省がある。ここも難民や亡命者がやすい。もともとどちらから難民が出るのか。これには笑い話があつて、豆満江では泳いで渡れないように、川の中に鉄条網を張った。それはいったいどちらの国が張ったのか——。中国側も張った、北朝鮮側も張った、両方で張ったんだと（笑）。

中嶋 「三つの中国」と僕は言うんですが、中華人民共和国、台湾、香港。それぞれがおさまっているうちはいいの、大陸中国が爆発したら大変なことになります。あのよう大きな国は、将来、それぞれ一定のサイズに分権化して、難民などが出ない良い政治をしようしか方法はないと思います。

ともかく、中国がこの先、大混乱に陥らないためにはどうしたらいいのかというポリシーを、我々も考える必要がある

と思うんです。それは決して内政干渉ではない。中国は人口だけを見ても、十三億からやがて十五億人になる。これをどう組みかえていくかは、まさにグローバルな関心事で、公害問題一つをとっても、世界中に大変な影響を与えるんです。

まだあまり表面には出ていませんが、中国の公害の撒き散らしも、これから大問題になるでしょう。浦東開発もいけれど、上海のあの汚なさ。昔懐しいブロードウェイ・マンシヨン、いまの上海大厦からバンドのビル街を見ようとしても、スモッグで、午後になっても何も見えないんですよ。天津でも、李瑞環がいろいろな建物を作ったけれど、天津に降りたとたんに悪臭が鼻につく。フロンガス、 CO_2 、温暖化の問題にしても、周辺諸国は中国の圧力を感じざるをえないんです。

長谷川 その通りですね。

中嶋 それからもう一つ、中国の困った問題として武器輸出があります。イスラエルにもシリアなどアラブ側にも、また近隣のアジア諸国にも無原則に武器を輸出している。世界中が軍縮にむかう傾向のある中で、平気で、死の商人の役割を果しているんです。

長谷川 中国から武器を買おうとする国には三種類あります。一つは内戦をかかえている国。これは沢山あります。例えば、バキスタンを経由してアフガンの反政府ゲリラが中国製の兵器を使っている。カンボジアで埋められている何十万という地雷の過半数が中国製です。フィリピンの新人民軍(NPA)の武器も中国のものですね。余談ですが、私は、中

国に睨まれている存在ですから、中国共産党の影響力のあるところへはいきません。ですから、マニラから招待をうけると、私は、安全を保障できるかとNPAに必ずレファアーするんです。NPAは不思議なことに必ず北京にレファアーする、正直ですね(笑)。で、北京からの指令では安全を保障できないといってくる、じゃマニラ行きはやめよう、となる(笑)。

そういう内戦国への武器輸出が第一。それから、いま中国が力をいれているのは、隣国への武器輸出なんです。特にミャンマー。ミャンマーには外貨がありませんからツケで売っています、同様に北朝鮮にもツケで売ります。これも隣国ですから押さえておかねければならない。最後に、ごく僅かですが、国際マーケットがあります。例えば、ソ連が開発した自動小銃AK47の中国型改造銃を、中南米が買っているとか。でもほんの少しです。

中嶋 AK47自動小銃は天安門事件でも使いましたからね。こんなことをするから、中国はかつて第三世界の盟主たらんとしていたわけですが、その神通力がなくなっていましたね。第三世界自身が目覚めたために、社会主義の吸引力もなくなりました。いまや第三世界がめざしているのは、いかにしたら西側の自由経済とリンクできるか、第二のNIESになれるか、ということなんです。

長谷川 ええ、例えば、アフリカにタンザン鉄道というのがあった。中国の第三世界に対する援助のシンボルとして、よく引きあいに出された鉄道です。それがいまどうなってい

るか？ 残っているのは路盤だけで、そこが道になっている。レールは近所の住民がとりはずし鋤や鎌にしてしまった（笑）。何とかしてくれと中国に頼んでも、つれない返事しかない。

ともかく「和平演變」といって、世界の大勢に背をむけていけば、中国が国際社会でしかるべき地位を占めるチャンスなどない。西側に対しても第三世界に対しても信用がなくなる。それがやはり厳しい現実だと思います。

天皇訪中で日本は孤立化へ

中嶋 世界の大勢である「脱社会主義」というのは、単に革命国家が敗北したということではなく、革命国家に呪縛されていた人たちを解放するということでもあるんですね。歴史の歯車は、明らかにそちらをむいているのに、「けしからん」と締めつける。しかも、ただ黙って坐っているだけの学生たちを深夜に銃撃するなんて、現代の世界ではあってはならないことを堂々とやって居直っているわけです。そういう体制を根本から覆すことなしに、改革も開放もないんですけどね。

長谷川 ええ、改革・開放以前の問題ですよ。

中嶋 その認識が日本は甘いと思いますね。世界は依然、厳しい目で見ているのに。

一月下旬から二月にかけて李鵬首相がヨーロッパを訪問したんですが、各地で拒絶反応にあっている。スイスの大統領

は二十七名の人権被抑圧者の名簿をつきつけて説明を求めたというし、司法大臣は昼食をボイコットした。ローマ市長も会見を拒否しているし、各都市で市民デモがおこった。スペインやポルトガルも厳しかった。それほど天安門事件の記憶は強烈なんです。アメリカの議会もブッシュ大統領が中国に最恵国待遇を与えるのを反対している。

長谷川 李鵬は行けば何とかなると思っていたんでしょ。それが何ともならなかった（笑）。しかし、そういう厳しい現実には直面したからこそ、あれほどの保守派であっても「経済改革が必要だ」と、言うことが変わってきたわけです。もし李鵬が日本に来ていたら、おそらくそんなこと言わなかったでしょう。

中嶋 ええ。この四月上旬に江沢民総書記が来日するわけですが、天安門事件以後の中国要人の訪問を大歓迎する国なんて、西側では日本だけでしょうね。逆にいえば、中国は日本だけが頼りになってしまった、というか、日本をナメているんですね。迎える日本の側も、過去をもちだされると、ともかく頭を下げるという「贖罪外交」の面がありますし、そもそも「対中国位負け外交」の体質がある。

長谷川 日本の政治家は、中国に甘く見られてもしようがない弱点を沢山もっていますね。しかもそれは与野党共通している。これは他国、例えば旧ソ連なんかに比べても著しい特徴ですね。むしろ野党のほうが、その色彩が強いです。

中嶋 この間の田辺訪中なんか、まったく野党らしさがありませんでしたね。野党というのは、もっと民主主義とか人

権に敏感でなきゃいけないのに。

長谷川　ですから、いま一番の焦点は天皇の訪中問題ですよ。

中嶋　ええ。天皇の訪中については、皇室外交、そのものが争点になることは控えたほうがいいと私は思うんですが、専門家の立場から一言いわせていただくと、今年は、とても天皇が安心して訪中されるような環境ではないですね。

私個人は天皇陛下にも是非中国を見ていただきたいと思うのですが、いまは時機が悪い。ところが中国はすごく期待しているんですね。西側諸国がソツポをむき、国内が互いに競っている中で、日本の由緒正しい天皇がわざわざ訪問されるというのは、中国にとっても有難いことなんです。だから、世論を抑えて大歓迎するかもしれません。だけど、そのこと自体が、中国の国際戦略の一環に組みこまれてしまうということですし、世界中が依然として厳しく見ている中で、日中が過度に結びつくことになるマイナスを考えなければならぬですね。

長谷川　もし天皇の訪中が実現すれば、日本は国際社会から村八分にされる危険性がある。それだけの覚悟が政府首脳にあるのか、ということですね。実はその点を最も懸念しているのがアメリカです。宮沢政権は天皇訪中をきめるのではないかと、警戒していますよ。

中嶋　ジャパン・バッシングの風潮があるだけに、日本はやっぱ天安門事件の中国と同じで野蠻だ、といった黄禍論的論調が出てくる可能性もありますね。

それに細かいことをいうと、天皇が訪中すると返礼に誰が来日するのか。国家元首は楊尚昆主席ですね。あの血ぬられた指導者の楊尚昆など来たら、世界の良識派の知識人にも、中国の多くの人民にも、日本外交は汚点を残すことになりそうですよ。それに、皇室に対するシンパシーを今なおもっている台湾の人たちに、天皇訪中はどう映るのか、そういったことも考えなければならぬ。

長谷川　天皇訪中をきっかけに、日本が孤立化することになると、今度は世界経済にまで影響が出てくるんですね。なぜなら日本は世界一の金融大国になっていて、日本から投資をしてもらわなければ、世界の経済がうまく回らないのに、日本を村八分にしたら、止ってしまふ。第一、日本は世界で一番大きい農産物の輸入市場でしょう。鉄鉱石、石炭の輸入も世界一です。その日本が孤立したら、世界の経済は大混乱してしまふ。そういうところまで目配りして政府は天皇訪中を考えているのかどうか。単に「アジアは一つ」、仲よくすることはいいことだ、といった情緒的な思いこみで決断が下されるようなら、重大なマイナスですよ。

中嶋　そう、「アジアは一つ」が、もっとも危険なんです。いまも経済の話がでしたが、中国を考える場合、政治や外交、人権の面のみならず、やはり経済面から見ておくことが大事ですね。「三つの中国」を貿易総額で見ると、一番大きいのは、名目上、香港なんです。千八百億米ドルくらいの輸出がある。次が台湾で千四百億米ドル、中国本土が千三百億米ドル。あんな小さな香港や台湾のほうが、経済的には

中国本土の上にある。しかも香港の貿易が伸びたのは、中国向け再輸出となる台湾からの輸入が急増したからなんですね。

長谷川 台湾は香港経由でものすごく輸出入をしている。ですから、台湾がとうとう世界一の外貨準備保有国になってしまったんです。まもなく九百億ドルを突破します。日本は六百八十億ドルですから、二百二十億ドルも開いている。しかも人口は日本の六分の一でしょう。

中嶋 その力は無視できないですね。最近バルト三国や旧ソ連、ベトナム、あるいは北朝鮮にも影響力を行使しているんじゃないですか。この二十年の間、政治的には国際社会から孤立しながら、まさに民際外交、民間外交で、台湾が実に立派な存在になったという現実を日本人はきちんと評価しないといけませんね。日本は自由経済でいくといっている。だとすると、大事にすべきは、むしろ台湾であり香港なんです。それを無視して一党独裁の本土と結びつくというのは、何とも情緒的、非合理的な外交ですね。

長谷川 でも、それも徐々に風向きが変ってきましたね。経済界、例えば鉄鋼業界なんて宝山製鉄所の経験で、中国にはもうコリゴリしている。だからいろいろなことが提案してきても、現地調査にすら行こうとしませんね。

中嶋 大体、中国の改革・開放というのは、他人の権で相撲をとうとうということなんです。自分でカネを出さずに、人から出させて、しかも利益は自分で全部吸いあげたい、できた製品も売ってほしい……。

長谷川 虫のいいことばかりいっている。

中嶋 じゃ中国自身がどれだけの資本をもっているのか。国家財政は赤字でしょう。資金の余力がないんですね。

長谷川 財政が赤字なのは、国营企業が赤字だからですね。中国の鉱工業生産において国营企業が占めるシェアが、間もなく五〇%を割るんです。たぶん今年割るでしょう。五〇%を割ったときに、中国共産党の基盤がくずれるときです。

中嶋 個人経営が多くなっていますね。

長谷川 いわゆる郷鎮企業ですね。郷鎮企業は軒並み黒字なんです。また黒字でない郷鎮企業なんて、もない。

急速に白くなる「赤い大陸」

中嶋 そういう意味で、いま「赤い大陸」は、実際には中から白くなってきているんです。これは香港、台湾の影響でしょう。だから鄧小平が香港、台湾に頭を下げるのなら分るけれど、逆に香港にも軍を派遣し、台湾を「武力解放」するなんて脅しをちらつかせている。実際は中国が香港を回収し、台湾を統一するのではなく、香港によって中国が変る、台湾によって中国が変わりつつある。やがては頭だけが赤い丹頂鶴になっていくと思いますね。

長谷川 まだ奥地が残っていますね。例えば揚子江から沿岸百キロずつとると、その先の奥地はまだ真っ赤つかです。白くなったところは国土の何分の一かで、人口からいっても半分にはまらない。

中嶋 でも白くなるスピードはこれからますます加速されると思いますよ。先日は厦門へ行ってきたんですが、一般の人が台湾風員になっているんで驚きました。「李登輝総統が北京に来て中国全体を治めてほしい」と真顔で言ってた知識人もいました(笑)。

長谷川 いや、それはみんな言う。国民党時代は賄賂にも相場があった。共産党になったら相場がなくなつて、かえつて都合が悪いと(笑)。例えば裏口入学するにも、定まった相場の額だけ払つていけばよかった。ところが共産党になったら、表むきは賄賂はいけないといいながら、裏では無茶苦茶になつて、全体として金額が上がつてしまつたつて。

中嶋 対台湾工作小組というのが大陸にあつて、楊尚昆がその組長なんですが、去年の一月、彼は何と言つたか。「台湾崇拜思想を克服せよ」つて。

長谷川 ハハハハ。人口二千万の島が十三億の大陸のモデルになつてしまつたわけですね。しかし中国本土の指導者には、大國意識、戰勝國意識があるから、いくら言つても聞く耳をもたないでしょうけどな。

中嶋 まア鄧小平が生きている限りは、彼の権威で中国の現体制も何とかもつと思いますが、それでも第二、第三のゴルバチョフやエリツインが中国内部から出ないという保証はないわけですね。ゴルバチョフだってエリツインだって、ついこの間までバリバリの共産党員だったんですから。

そんなふうに言うと、日本の一部の論者の中には、中国は農民が八〇%も占めている。しかもソ連と違つて食べられる

ようになった、だから中国はソ連のように簡単に共産党政権は崩れない——といった鄧小平と同じ言い方をする人がいるんですね。いずれ歴史が証明すると思いますが、そもそも人口の八〇%をいまだに農民にしておくという共産党の政策自体が時代遅れの誤りであり、それを正当化する人たちは、中国を蔑視しているんですよ。

長谷川 おっしゃる通りですよ。

中嶋 問題はいつ崩壊がくるかですが、先ほどの十四回党大会、これも一つの見所ですね。もう一つの見所は、香港返還、これが五年後ですね。このときどんな形で返還されるかが大問題。何しろ香港では天安門事件のときに二百万人がデモをしました。人口の実に三分の一です。また、この前の立法評議会の選挙では、六十人のうち十八人だけが民選なんです、親中国は何とたった一人だった。

そもそも香港は民意を問われることもなく、住民の頭越しに、鄧小平とサッチャーの間で返還が決つたわけで、これから先、香港の住民がどう動くか、それも見逃せない要素ですね。

長谷川 ええ。ただ、私は中国共産党の崩壊は五年後の九七年まではかからないと見てるんです。本土の台湾化、香港化が急速でしょう。それがいつ表面化するか——。秋の十四回党大会が一応何とか終わつても、それで最後だと私は思うんです。ソ連だって二十八回大会から崩壊まで、どれくらい時間を要したか。あれよあれよという間でした。中国も同じだと思ふんです。だから今年から、遅くとも九四年にかけて、中国には大変動がくる、個人的にはそう思っているんです。